

## 定例研究会要旨

日時：平成 27 (2015) 年 7 月 15 日 18:00~20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

「外語大生の英語スピーキング学習方略分析についての中間報告」

発表者：周 育佳（東京外国語大学非常勤講師）

井之川睦美（東京外国語大学英語学習支援センター）

鈴木陽子（東京外国語大学グローバル人材育成言語教育プログラム）

近年、外国語教育において教師中心の指導から学習者中心の指導へとシフトしつつある中で、学習者の学習方略使用が注目されるようになった。その背景として次の理由があげられる。(1) 言語学習において学習者の方略使用は重要な個人要因の一つである。(2) 優れた学習者が用いる学習方略を特定することによって、それらを言語学習に役立てることができる。(3) 学習方略を有効に使用することは自律学習につながる。(4) 学習方略は指導可能であると考えられる。

これまでに学習者の方略使用について多くの調査がなされてきたが、以下に関する調査が不十分である。(1) スピーキングの指導が重視されつつあるが、スピーキング・スキルに関する学習方略使用に関する調査がほとんどない。(2) スピーキング学習方略の使用調査において、妥当性の高いアンケートを用いたものが少ない。(3) Proficiency と方略使用の関連調査で、一致した結果が得られていない。(4) 従来の調査は方略使用の概略的パターンや方略項目分類に関するものが多く、個々の方略に関しての調査が十分ではない。

したがって、本研究の目的を①スピーキング学習方略使用を調査するためのアンケートを開発すること、②東京外国語大学（以下、外語大生）英語学習者のスピーキング学習方略使用のパターンを調べること、③Proficiency とスピーキング学習方略使用の関連を探ることとし、以下の research question (RQ)を設定した。

RQ1:実施したスピーキング学習方略使用のアンケートはどのような因子構造を示すか。

(Study 1)

RQ2:外語大生はどのようなスピーキング学習方略を使用しているか。(Study 2)

RQ3:スピーキング学習方略使用は Proficiency とどのような関連を示すか。(Study 2)

### Study 1

参加者は東京外国語大学英語学習者 288 名である。アンケート回答における欠損値を除き分析対象としたのは 253 名、そのうち英語を専攻語としない学生が約 88%、2 年生が約 83%、女子が約 75%である。

アンケート項目作成の第一段階として、先行研究 (e.g. Oxford, 1990) からスピーキング・

スキルに関する学習方略 46 項目を抽出した。同時に外語大生 96 名にスピーキングに関する学習方略について自由回答式アンケートを実施し、その結果から使用頻度の高い 6 項目を抽出した。抽出した 51 項目を発表者 1 名が Cognitive、Metacognitive、Compensation、Affective & Social の 4 つのカテゴリーに分類し、他の 2 名がその分類を確認した。各項目への回答スケールは 6 段階を採用した。アンケートは日本語で作成し、発表者 1 名が英語での項目を日本語に翻訳、他 2 名が確認した。回答者の基本情報を尋ねる項目として、性別、周囲での英語話者の有無、海外在住経験等を加えた。アンケート用紙には、回答結果が成績に影響を与えないこと、研究目的のみに使用すること、氏名や回答結果の特定はされないことを明記した。

アンケートは、2015 年 2 月に英語教育関連授業（回答者数の約 4 分の 3）と、TOEIC-IP SW テスト会場で実施した。事前にアンケート実施担当者にガイダンスシートを配布し、実施手順の統一を図った。全回答はマークシートに記入された。

データ分析では、まず、各項目の平均値と標準偏差を確認し、天井効果、床効果がある項目、使用頻度の低い項目を削除した。また、修正済み項目合計相関の 0.4 以下の項目も削除した。その結果、Affective と Social 方略項目の全てが削除された。残りの項目に探索的因子分析（主因子法；プロマックス回転）を行った。固有値 1 以上とスクリープロットを確認し因子数を決定したが、1 つの因子にのみ 0.5 以上の因子負荷量を示した項目を残した。その結果、3 因子と 20 項目（Cognitive：8 項目；Metacognitive：6 項目；Compensation：6 項目）が抽出された。アンケート全体は高い信頼性（ $\alpha = 0.892$ ）を示し、各因子の信頼性も 0.8 以上であった。

カテゴリー分類の結果については先行研究とほぼ同様の結果となり、スピーキング学習方略使用が Cognitive、Metacognitive、Compensation の 3 つの観点からまとめられることが示唆された。Affective と Social 方略項目が除かれ、この 2 つのカテゴリーの方略使用頻度が少なかったとする先行研究の結果と一致したものの、今後、項目数を増やして再調査する必要がある。さらに、残った Cognitive と Metacognitive 方略項目の多くが話す際に使用される項目であり、学習する際の方略が少なかった結果から、今後、後者の項目を増やしたり、アンケート用紙に別々に提示したりする工夫が必要であろう。また、20 項目を含むアンケートが高い信頼性を示したが、教室内でスピーキング学習方略使用を学習者に認識させたり、研究調査に使用したりすることが可能であることが示唆された。

## Study 2

Study 2 では、Study 1 で分析対象としたアンケート回答者中、TOEIC-IP テストを受験した 219 名を分析対象とした。Study 1 で作成、実施、因子分析した結果に基づいた 20 項目の平均値を全体的な方略使用頻度とし、各下位項目の平均値をその項目の使用頻度とした。分析対象となる学生の約 90%がアンケート実施と同月に TOEIC-IP テストを受験した。TOEIC-IP テストスコアに基づき、分析対象を High、Mid、Low レベルの 3 グループに分けた。

分析結果であるが、全体的なスピーキング学習方略の使用頻度は Medium (6 段階スケールの 2.50~4.49) であり、アジアの国の大学生を対象とした調査結果とほぼ一致している。カテゴリー一面では、Compensation と Cognitive 方略が最も用いられている結果も先行研究と一致している。使用頻度の高い方略は、「会話でなじみのある単語を使う」、「会話で簡単な文構造を使う」、「周囲から英語が聞こえてきたら、話の内容がわかるか聞こうとする」、「テレビを見たり、ラジオを聞いたり、映画を見に行ったりする」であった。Metacognitive 方略については、「話す内容を事前に考える」と「話す前に単語が十分適切かどうか考える」の使用頻度が最も高かった。

学習方略使用と Proficiency の関係については一貫した結果が出ていない。全体的には Mid グループの方略使用頻度が有意に最も高く、他の 2 グループには有意差がなかった。カテゴリー一面では、High グループが Cognitive 方略を、Mid と Low グループが Compensation 方略を最も頻繁に用いることが分かった。さらに Mid グループの方略使用頻度が最も高かった。20 項目中、High グループは「新しい単語や表現を学ぶ際、それらの使い方の例を調べる」、「英語で考える」、「英語を話すチャンスを探す」が他のグループに比べ頻繁に使用している。一方、Mid と Low グループは「話す内容を事前に考える」、「話す前に単語が十分適切かどうか考える」、「文法が十分適切かどうか考える」をより頻繁に使用していることが分かった。3 グループ間の使用頻度に有意差があったのは 20 項目のうちの 7 項目であり、そのうち 6 項目で Mid グループが最も高かった。

本調査の限界点としては、まず、調査結果を異なる文化背景を持つ学習者や男性を中心とする調査サンプルに一般化するのは難しいと考えられる。また、本調査の参加者の TOEIC-IP スコアが比較的高いことと言語関連を専門とする大学生であることから、英語能力と英語学習への動機づけが比較的高い可能性が推測されるため、調査結果を一般化しにくいと思われる。さらに、アンケート調査は学習者自身による回答であり客観性に欠ける懸念がある。最後に、学習方略項目に 6 段階で回答してもらったが、6 段階の頻度表現の適切さを判断することは難しく、回答者によって異なる解釈になった恐れがある。

今後の課題としては、作成したアンケートを異なるサンプルで実施することによってアンケートの信頼性と妥当性を確認することをあげたい。また、Proficiency と方略使用の関連についてのより妥当性の高い結論を得るため、スピーキング・テスト結果との関連を探りたい。